

# サルモネラ菌食中毒の防疫指針における 日米間の発想の違いについて

渡辺 誠<sup>†</sup>

## The Differences in ideas between Japan and the U.S. on the prevention guidelines of Salmonella food poisoning

Makoto Watanabe

### 1. はじめに

#### 1.1 研究の動機

仕事で経験してきたことを言語学の視点で見直してみることに興味を覚え、修士論文では鶏卵の生産・保管に関する文書である「サルモネラ菌食中毒の防疫指針」における日米間の発想の違いを取り上げることにした。認知言語学については、「事態把握の仕方の違い」に止まらず、「視野の共有」や「時の推移表現」等人の認知にさかのぼった興味深い視点が論じられており、今回の研究に適切であると考えた。

#### 1.2 サルモネラ菌食中毒について

日本には卵を生食する食文化があるが、サルモネラ菌食中毒の発件数は表1の通り米国と比べてはるかに少ない。サルモネラ菌食中毒に関する科学的知見はWHOを通じて国際的に共有されている[1]。さらに米国では鶏卵パックに「十分加熱して食べること」のラベル表示が義務付けられ[2]、汚染卵に対しては輸出したものでリコールするという徹底ぶりである[3][4]。にもかかわらず、この差が生じる理由は何なのであろうか。サルモネラ属菌の一種であるサルモネラ・エンテリティディス（以下SE）は、卵内部にSEが入り込むインエッグ（in egg）汚染が問題となる[5]。そして日米両国ともに、鶏卵の生産段階——つまり採卵養鶏場におけるSE汚染を防止するための防疫指針を定めている。

#### 1.3 研究の方法

本研究は、SE食中毒の防疫対策として日本の農林水産省が定めた防疫指針[8]とこれに相応する米国のFDAが定めた防疫指針[9]を対比して、日米間の発想の違いを認知言語学の観点から明らかにするものである。特に著者が注

表1 日米におけるサルモネラ菌食中毒の年間患者数  
及び死亡者数の対比

	米国	日本
公表元	CDC	厚生労働省
年間患者数	1,350,000人	698人
年間死亡者数	420人	0人

（日本のデータは厚生労働省が公表している「令和4年食中毒発生状況」[6]。米国の数字はCDCのHPによる[7]。）

目した下記の4点について論じる。

- ① ウチとソトについて
- ② 「視野の共有」と知覚的（視覚的）な発想及び思维的な発想について
- ③ 「視点」と時間の把握について
- ④ Figureの絞り込みについて

### 2. 認知言語学の先行研究について

本研究は自然科学系に近い文書を対象とするものであるが、認知言語学の先行研究において、自然科学の分野を研究対象としたものは見当たらなかった。一方で金谷（2004）は、品質管理という科学技術に関連する分野でも日本的発想と米国的発想の違いがみられることを指摘しているが[10]、経営からの視点が抜けているように思われる。その点防疫対策は日米共に「疾病者数を減らす」ことが目的であって「費用対効果」といった別の側面は関与しにくいと思われるので、発想の違いを対比するには最適であろう。

認知言語学について、濱田（2016）は認知文法の言語観の根底にあるのは、対象物を観るという「知覚体験」であ

<sup>†</sup>2023年度修了（人文学プログラム）

サルモネラ菌食中毒の防疫指針における  
日米間の発想の違いについて

り、知覚体験を抽象化した認知操作によって、概念世界においてもモノや出来事を認識しているとする見方であると述べる[11]。さらに山梨(2019)は、認知操作について「この能力は、空間認知、五感、運動感覚、イメージ形成、視点の投影、視点の転換、カテゴリー化、参照点能力、等に関わる人間の一般的な能力の一種として理解する」(p.2)と指摘する[12]。つまり、認知操作については日本語においても英語においても変わらないという理解である。

一方で、日本語における事態把握について姫野(2009)は、日本語における事態把握・言語化は、事態の現場に自分が臨場しているというスタンスを取るタイプに非常に強く傾斜していると述べる[13]。また、牧野(1996)は知覚を通じた認知操作が文化によって影響を受けると主張している[14]。

第3章にて詳述する「ウチとソト」に関する先行研究については牧野(1996)が詳しい。日本人には「ウチ=我が家」の文化が成立しており、ウチはソトに対しては「聖域」であるとまで表現している[14]。

第4章では『『視野の共有』と知覚的(視覚的)な発想および思惟的な発想について』論じるが、濱田(2016)は日本語で冠詞の体系が発達していないのは「場面内視点」で出来事を認識しているからだとして述べ、日本語は「視野の共有」を前提に会話が成立していると結論付けている[11]。このことをさらに突き詰めて考えれば、牧野(1996)のいう「デカルト的な知性中心の分析」の文化と「感性中心のものの理解を重視している」文化の違いが背景にあるだろう。さらに「デカルト的な知性中心の分析」はベルク(1985)のいう論理であり、「感性中心のものの理解」とは経験律を指すことになるだろう[15]。

第5章の論点である『『視点』と時間の把握について』に関して、尾野(2018)は、日本語では、「視点」が「場面内」にあることから、「時間」と「空間」を「体験的に」把握し、「知覚体験的」な表現となり、また語りの場が認識の原点となるため、現場の「生きた時間」が流れていると述べている[16]。この点について守屋(2009)は、日本語では事態の出来の事実を、物理的・客観的な時間軸よりむしろ発話者のイマ・ココの認知との関わりにおいて捉える傾向があると述べる[17]。

第6章で論じる「Figureの絞り込みについて」に関して、濱田(2016)は、「Figure/Ground認知」について意識が向けられ目立って認識されているものをFigure(図)、背景をGround(地)と説明する[11]。尾野(2018)は、増田(2010)の「ミシガン・フィッシュ課題」[18]という心理学実験の例を引きながら、日本語話者が背景を最初に述べるのは、日本語表現の基本となる事態把握のスタンスが、画面全体を「見えているまま」に把握するという「知覚感覚的なコト的把握」によるものであり、英語話者が中心となる目立った魚について言及するのは、「Figure/Ground認知」によって、中心となるモノに焦点

を当てるためであると主張している[16]。

山梨(2019)は別の角度から、英語の場合には、探索の対象は動詞の目的語になるが、探索領域としてのサーチドメインは動詞の目的語にならないとする[12]。一方、日本語の場合には、探索の対象もその探索領域も動詞の目的語になることが可能であると述べて、<モノ的認知>と<状況的認知>の違いがあることを指摘している[12]。

### 3. ウチとソトについて

図1が示しているように、SEの防疫対策の主要項目は日米間で一致しているが、日本の防疫対策は「外」からの「侵入防止対策」と養鶏場「内」での「採卵養鶏場の衛生管理」に2分割されている。具体的には、「外来者等の立入り」や「導入ひな」は「ソト」から「ウチ」への侵入防止対策であり、「媒介動物の駆除」や「鶏舎の消毒」は「ウチ」の中の衛生管理対策である。つまり、「ソト」と「ウチ」という区分けがされているが、米国の指針にはこのような区分けは見られない。このことは、日本文化における「ウチとソト」の視点が防疫指針においても自然と発想されているからだろう。

#### Sec. 118.4 Salmonella Enteritidis (SE) prevention measures

You must follow the SE prevention measures set forth in this section. In addition, you must have and implement a written SE prevention plan that is specific to each farm where you produce eggs and that includes, at a minimum, the following SE prevention measures:

- (a) Pullets.
- (b) Biosecurity.
- (c) Rodents, flies, and other pest control.
- (d) Cleaning and disinfection.
- (e) Refrigeration.

#### 第3 侵入防止等の衛生管理対策

サルモネラは、ひな、人、媒介動物、管理器材、飼料等様々なものを介して農場に侵入し、自然環境下における抵抗性が強く、一度汚染されると清浄化が困難となることから、次により農場へのサルモネラ侵入防止を図るとともに日常の衛生管理を徹底する。

#### 3 採卵養鶏場

- (1) 侵入防止対策 [ソトからウチ]
  - ア 施設・設備
  - イ 外来者等の立入り
  - ウ 導入ひな
  - エ 飼料及び飲水
- (2) 採卵養鶏場の衛生管理 [ウチ]
  - ア 飼養管理
  - イ 媒介動物の駆除
  - ウ 鶏舎の消毒等
  - エ 採卵時の衛生対策

図1 日米間の侵入防止等衛生管理対策の対比

(図の左側はFDAの防疫指針 Sec.118.4の大項目を抜き出し、右側は日本の防疫指針「第3 侵入防止等衛生管理対策」の採卵養鶏場の大項目を抜き出して、関連する項目を矢印で示している)

ウチとソトの区別をするかしないかは、サルモネラ検査が陽性になった場合の対応の仕方について、重要な発想の違いに結び付いている可能性がある。日本では、陽性になった場合は当該鶏群をとう汰することになっている。鶏舎の中(ウチ)は、清潔でなければならないし、ウチの中の清潔さを維持できるという発想が根底にあると思われる。一方、米国ではSE環境テストが陽性であった鶏群については、2週間間隔で4回egg test(エッグテスト)を実施し、全て陰性であった場合には、テーブルエッグ市場(生鮮市場)への出荷が認められる。一度でも陽性があった場合には、4回続けて全て陰性になるまでエッグテストを実施し、その場合には、陰性になった以降

も月に1回のエッグテストを実施することになる。つまり、日本では「清浄化」を求め、米国では「確率による判断」を行うことになる。

米国の防疫指針では、そもそもウチとソトとを区分けしていないので、「清浄区」があるという発想にはならないのであろう。従って、ウチもソトもなく、陽性結果が出た鶏群に対しても、卵のサンプリングを通して、統計的に、確率的にリスクを判断せざるを得ないと考えているようである。つまり、米国のようにウチもソトもなくどこもかしこも汚染されているという事態認識であれば、確率論で判断するしか方法がないと思われる。日本では「ウチ」＝「清浄区」を設けるという考え方で一度汚染された農場も清浄化できる。もっとも、「ウチ」＝「清浄区」を維持するためには「家の中には靴を脱いで入る」というような文化基盤が必要なかもしれない。

米国では加熱して喫食することが条件となっているので、防疫指針の対策が緩く、鶏の淘汰までは求めないのではないかという指摘があるが、上記の患者数/死亡者数の数字が許容範囲内にあるとはとても思えない。また、米国の防疫指針では産卵後36時間以内に華氏45度以下（約7.2℃以下）で保管もしくは輸送することを義務付けているが、日本の防疫指針よりもはるかに厳しく、コスト増となる施策である。もし加熱して喫食することを前提にして対策を考えているのであれば、このような厳しい条件は必要ないであろう。このように考えてみると、米国で鶏の淘汰まで求めているのはウチとソトの区分けをしていないために淘汰して新しい鶏に入れ替えても直ぐにまた汚染されると考えているためと思われる。

#### 4. 知覚的（視覚的）な発想と思惟的な発想の違いについて

米国の防疫指針の Sec. 118.3 Definitions の項に“Treatment (or treated) means a technology or process that achieves at least a 5-log destruction of SE for shell eggs,” (p.1) とある[9]。日本には厚生労働省が定めた「液卵の製造等に係る衛生確保について（平成五年八月二七日）」があるが、次のように定めている[19]。（一部抜粋）

液卵（加糖又は加塩したものを除く。）

ア 連続式により加熱殺菌する場合

全卵：六〇℃、三・五分間

卵黄：六〇℃、三・五分間

卵白：五五～五六℃、三・五分間

イ バッチ式により加熱殺菌する場合

全卵：五八℃、一〇分間

知覚に頼らず頭の中で考えたことを「思惟的」と定義するのであれば、米国の防疫指針にある“a 5-log destruction of SE”はSEを10の5乗分の1に減らすという

ことであり、知覚的に確認出来るものではなく、思惟的に発想していると言える。そして思惟的な発想の最たるものは数学である。これに対して、知覚（主に視覚）に判断根拠を求めることを「知覚的（視覚的）」と定義するのであれば、日本の文書は、殺菌温度、時間を明示して、知覚的（視覚的）に認識した事態を根拠に判断することを求めていることから知覚的（視覚的）に発想していると言えるであろう。殺菌温度、時間を視覚的に確認して「視野の共有」をしながら情報交換を進めていく。さらに、視覚的に取り決めた殺菌条件という基準を「視野の共有」——知覚的に共有すること（経験律）——を通じて周知していくことになる。

#### 5. 「計画書の作成」と時間の把握について

米国の防疫指針では“a written SE prevention plan that is specific to each farm”の作成/実施が義務付けられているが[9]、日本の防疫指針にはない。日本の防疫指針では計画書の作成が義務付けられていない理由について考えてみたい。

##### 5.1 「視点」と時間の把握について

米国の防疫指針には、検査の時期について鶏の週齢（14～16）の記載があるが[9]日本の防疫指針では本文中には記載がなく、付記3にまとめて記載されている[8]。

（米国の防疫指針“Sec.118.4 Salmonella Enteritidis (SE) prevention measures”の中の“Pullets”の項）

(2) *Environmental testing.* (i) The pullet environment is tested for SE when pullets are 14 to 16 weeks of age; (p.2)

（日本の防疫指針「3採卵養鶏場（1）侵入防止対策ウ 導入ひな」）

(ア) ひなは、1及び2の事項に基づく衛生対策を実施する等、適切な衛生管理を行っている種鶏場・ふ卵場から導入し、導入ひなの生産に係る種鶏群及びふ卵施設のサルモネラ検査成績の提出を求める。また、ひなの導入に当たっては、導入前に鶏舎を消毒（付記7参照）するとともに、鶏舎、導入ひな及びその輸送箱について検査（付記1、付記3参照）を行う。導入ひなの検査が不可能な場合、陰性証明書の提出を求める。（p.4）

この文章の「生きた時間」の流れは次のようになるだろう。

鶏舎、導入ひな及び  
鶏舎を消毒 ⇒ その輸送箱について ⇒ ひなの導入  
検査

サルモネラ菌食中毒の防疫指針における  
日米間の発想の違いについて

付記3は次のとおりである。(一部抜粋)

付記3. 採卵養鶏場のサルモネラ検査

- (1) 初生ひな(到着時)  
付記1—1の(1)に準ずる。
- (2) 7日までの死亡・とう汰ひな  
付記1—1の(2)に準ずる。
- (3) 2~4週齢ひな  
ア 床面育すうの場合：  
(ア) 床敷料面からDSで2検体を採取する。  
(イ) 換気孔、換気扇等の付着塵埃を2~5g  
ずつ10か所から採取し、5サンプルず  
つ混合して2検体とする。  
イ ケージ育すうの場合：  
略

尾野(2018)は、日本語では、「視点」が「場面内」にあることから、語りの場が認識の原点となり、現場の「生きた時間」が流れていると述べる[16]。日本の防疫指針本文は、場面内視点の「生きた時間」の流れの中で時間を把握している一方、付記3においては、「鶏の週齢」のような物理的・客観的な時間軸を場面外視点にて別管理している。日本語話者には、本文中に場面内視点と場面外視点という二つの視点を混在させるよりも、本文は場面内視点で、付記は場面外視点で統一した方がわかりやすいということであろう。

しかしながら、日本の防疫指針は自然科学系の客観的な文章である。どうして「生きた時間」の流れが感じられるのであろうか。再度この文章を見直してみると客観的な表現であっても「行為者」が明示されていない。従って、表現が語り手の「見えているまま」となり、客観的な文章であっても「語りの場が認識の原点」である日本語の特徴が維持されているのではないか。

一方で米国の防疫指針では行為者 You が明示されている。このYouは“generic you”であると考えられるが、Quirk, et al.(1985)は“*But you again retains something of its 2nd person meaning*”(354)と指摘している[20]。つまり、防疫指針の執筆者との関係は2者関係であり、その意味では執筆者の視点は場面内視点ということになりそうである。場面内視点であっても行為者が明示されていると物理的・客観的な時間軸を持てるのであろうか。

ところで、防疫指針に「計画書の作成」が盛り込まれていない理由としては、本文中に物理的・客観的な時間軸がないこと、つまり「行為者」の明示がなく、時間把握の仕方が場面内視点であること以外にも考えられるだろう。一般論として、計画書を作成しない理由としては

- ① 当事者以外のチェックが入りやすくなるのを避ける。
- ② 執行責任者の個人的資質の問題。

などが挙げられるが、ビジネスの世界では予算、決算、中期経営計画等々計画書の作成が日常化している。ビジネス

文書では「行為者」は必ず明示するし、客観的な時間を使うことも多い。つまり、計画的に発想するためには日本語においても行為者を明示して場面外視点で時間を把握することは既に行われていることである。防疫指針本文においても行為者を明示して場面外視点で時間を把握することで客観的な時間を持つことは可能であろう。

## 6. Figureの絞り込みについて

前項で取り上げた「導入ひな」の規定の中で、「陰性証明書」が突然登場することについて、まず日米間の事態認知の仕方が異なることを確認したい。Langacker (1999)は、“The choice of focal elements”と表現しており[21]、濱田(2016)は、英語話者は「その度合いを第一のFigure, 第二のFigureとして区別し、それぞれをトラジェクター(tr), ランドマーク(lm)と呼んでいます。」(p.31)[11]と述べ、focal elements(知覚上の見え)の絞り込みがおこなわれていることを暗示している。

日本語話者は「図(Figure)」の絞り込みを行っているのだろうか?尾野(2018)は、日本語話者は画面全体を「見えているまま」に把握するという「知覚感覚的なコト的把握」を行うと述べている[16]。ここからは、日本語話者では「図」の絞り込みは行われていないと考えられる。一方尾野(2018)は、英語話者は「Figure/Ground 認知」によって中心となるモノに焦点を当てると述べているが[16]、これは英語話者に限ったことではなく、日本語話者でも「Figure/Ground 認知」は行っているのではないだろうか。そして英語話者の場合は一連の認知過程として「図」の絞り込みまでが行われているのに対し、日本語話者の場合は「図」の絞り込みは行われていないと考えることはできないだろうか。

### 6.1 「知覚感覚的なコト的把握」と「Figure/Ground 認知」の関連性について

前述の「ミシガン・フィッシュ課題」を例に取れば、日本語話者は画面全体を「見えているまま」に把握して、藻・水生動物・「池のようなどころ」と背景に言及した後魚について述べる[18]。しかし、このことが仮に「知覚感覚的なコト的把握」によるとしても、藻・水生動物・「池のようなどころ」と「見えているもの」を述べる＝言語化する際には、「Figure/Ground 認知」が行われているであろう。つまり、「知覚感覚的なコト的把握」と「Figure/Ground 認知」は二者択一的な概念ではないと考える。

英語話者の場合は図2に示すように「図」を中心の魚に絞り込んで言語化していると考えられる。

ただし、英語話者が「知覚上の見え」を絞り込んでから「図」として認知しているのか、文章化する時点で「図」を絞り込んでいるのかについては議論の余地がありそうである。

サルモネラ菌食中毒の防疫指針における  
日米間の発想の違いについて

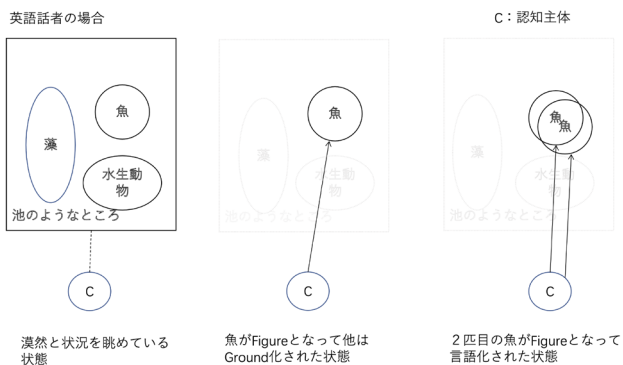


図2 英語話者の Figure/Ground 認知

一方、日本語話者の場合には図3に示すように、見えているままに総てが「図」となって言語化されていると考えられる。

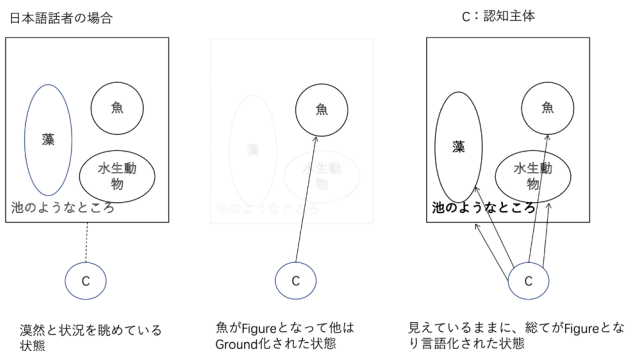


図3 日本語話者の Figure/Ground 認知

しかし、これは心理学実験の結果についての考察である。次節では日本語の語順について考えてみたい。

## 6.2 日本語の語順と「見えているまま」について

日本語の語順について、佐藤（2017）の例示している「[大草原の青い空]に[真っ白な雲]が[綿菓子みたい]に[浮かんでい]ました。」(p.48)という文に沿って考えてみたい[21]。言とは言葉のやりとりにおける最小限の意味のまとまりを差すが、この文では言は4つである。日本語では「図」の絞り込みが行われていないとすると4つの言を「見えているまま」に並べることができる必要があるのであるのではないかと考えた。可能性としては、24通りの並べ方ができるが、その並べ方に対応した文を考えてみると下記のようになる。

1. [大草原の青い空]に[真っ白な雲]が[綿菓子みたい][浮かんでい]ました。
2. [大草原の青い空]に[真っ白な雲]が[浮かんでい]て[綿菓子みたい]でした。
3. [大草原の青い空]に[綿菓子みたい]な[真っ白な雲]が[浮かんでい]ました。
4. [大草原の青い空]に[綿菓子みたい]に[浮かんでい]たのは[真っ白な雲]でした。

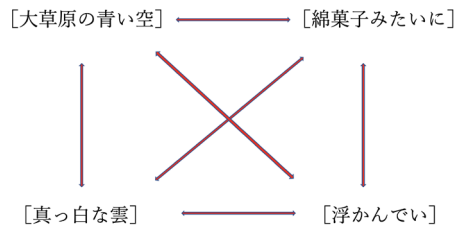
5. [大草原の青い空]に[浮かんでい]た[真っ白な雲]は[綿菓子みたい]でした。
6. [大草原の青い空]に[浮かんでい]た[綿菓子みたい]なものは[真っ白な雲]でした。
7. [真っ白な雲]が[大草原の青い空]に[綿菓子みたい]に[浮かんでい]ました。
8. [真っ白な雲]が[大草原の青い空]に[浮かんでい]て[綿菓子みたい]でした。
9. [真っ白な雲]が[綿菓子みたい]に[大草原の青い空]に[浮かんでい]ました。
10. [真っ白な雲]が[綿菓子みたい]に[浮かんでい]たのは[大草原の青い空]でした。
11. [真っ白な雲]が[浮かんでい]て[大草原の青い空]に[綿菓子みたい]にみえました。
12. [真っ白な雲]が[浮かんでい]て[綿菓子みたい]にみえるものが[大草原の青い空]にありました。
13. [綿菓子みたい]に[大草原の青い空]に[真っ白な雲]が[浮かんでい]ました。
14. [綿菓子みたい]に[大草原の青い空]に[浮かんでい]たのは[真っ白な雲]でした。
15. [綿菓子みたい]に[真っ白な雲]が[大草原の青い空]に[浮かんでい]ました。
16. [綿菓子みたい]に[真っ白な雲]が[浮かんでい]たのは[大草原の青い空]でした。
17. [綿菓子みたい]に[浮かんでい]たのは[大草原の青い空]の[真っ白な雲]でした。
18. [綿菓子みたい]に[浮かんでい]た[真っ白な雲]が[大草原の青い空]にありました。
19. [浮かんでい]るのは[大草原の青い空]の[真っ白な雲]で[綿菓子みたい]でした。
20. [浮かんでい]るのは[大草原の青い空]の[綿菓子みたい]な[真っ白な雲]でした。
21. [浮かんでい]るのは[真っ白な雲]で[大草原の青い空]に[綿菓子みたい]にみえました。
22. [浮かんでい]るのは[真っ白な雲]で[綿菓子みたい]に[大草原の青い空]にありました。
23. [浮かんでい]るのは[綿菓子みたい]な[大草原の青い空]の[真っ白な雲]でした。
24. [浮かんでい]るのは[綿菓子みたい]な[真っ白な雲]で[大草原の青い空]にありました。

「ある」や「みえる」という基本的な述語を使うものの、日本語は「見えているまま」に「図」を並べていってもかなり柔軟に文章化できそうである。

以上のように考えてくると、日本語の文表現の中に登場するための条件は、「見えている」ということになるであろう。しかも「見えているまま」を言語化する際には「図」を絞り込むことをせずに文章化する方法がありそうである。日本の防疫指針で「陰性証明書」がその内容につ

サルモネラ菌食中毒の防疫指針における  
日米間の発想の違いについて

日本語の表現方法



4つの言は並列であり、その場に最適な順に（見えているままの順に）言を繋いで文を組み立てていく

図4 日本語の表現方法

いて定義されることもなく突然登場するのは「見えている」からであると考えられる。なお、上記例の「綿菓子」のように、実際には見えていなくても頭の中で見えていれば「図」となることについては日本語も英語も同様である。

### 6.3 場面とrelationship（関係性）について

一方、米国の防疫指針にも頭の中で見えているだけの類似の表現が登場する。

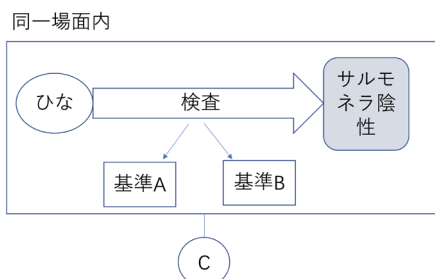
*Procurement of chicks.* Chicks are procured from SE-monitored breeder flocks that meet the National Poultry Improvement Plan's standards for "U.S. S. Enteritidis Clean" status (9 CFR 145.23(d)) or equivalent standard; (p.2)

（下線は著者による）

この項目に記載されている“equivalent standard”である。「陰性証明書」と異なるのはその元の基準が明確であることである。頭のなかで見えているだけにしても、場面（ここでは論理の繋がり）から外れるようなことはない。このことを図示すると

米国の防疫指針

C：認知主体



基準A: The National Poultry Improvement Plan's standards for "U.S. S. Enteritidis Clean" status (9 CFR 145.23(d))

基準B: Equivalent standard

図5 米国の“Equivalent standard”の場面

基準Bは“equivalent standard”である。ヒナのサルモネラ陰性を証明するための検査は基準Aもしくは基準Bに従うことを要求しているのだから同一場面内の話であ

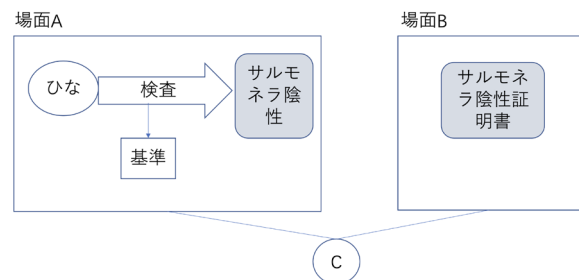
る。

ここでは場面という日本語を使用して説明したが、Langacker (1999) が“A relationship generally has one or more focal elements, normally describable as participants, which stand out with special salience within the relational profile.” (p.8) と述べている[21]のように、relational profile（認識の概念的鑄型）なのであって、その意味でも基準Bは場面内に納まっている。

一方、日本の防疫指針を図式化すると図6のようになる。

日本の防疫指針

C：認知主体



基準は「付記1及び付記3」

図6 日本の「陰性証明書」の「場面」

日本の防疫指針では、場面Aにてサルモネラ検査について述べている。検査基準は「付記1及び付記3」である。ところが場面Aとは全く関係のない「サルモネラ陰性証明書」が突然登場する。これが可能なのは「見えている」からだと考えられるが、場面としては「場面B」を新たに考えざるを得ない。日本人は、現「場」で考えることを好む傾向があるように思うが、日本語ではそもそもの事態の捉え方が視覚的（知覚的）であって「見えているまま」に「場」——複数の場面を含むこともある——として捉えるのだろう。「relationship（関係性）」より先に「見えているまま」を文章化しているように思える。

さらに、山梨（2019）の例文から次のものを取り上げて考えてみたい[12]。

- 子供は、川面に浮かんできた水草をすくい上げた。
- 子供は、水草が川面に浮かんできたところをすくい上げた。(p.17)

山梨（2019）は、aの文は＜モノ的認知＞を反映する文であり、bの文は＜状況的認知＞を反映する文であると論じている[12]が、Langacker（1999）の論を援用すれば、＜モノ的認知＞とは、「関係性」に着目した結果、必然的にモノを認知する仕方のことであると考えられる。例文aの場合は見えているままが「関係性」を表現している例である。一方、例文bの＜状況的認知＞とは「見えているまま」を表現することを優先した結果、「関係性」の把握が曖昧になった文章化の仕方といえるのではないだろうか。なお、山梨（2019）はaに対応する英語表現は“A child picked up a water-weed which floated to the

サルモネラ菌食中毒の防疫指針における  
日米間の発想の違いについて

surface of the river.” (p.20) であるが、bに対応する英語表現は不可能であると述べている[12]。このことからbの例文は「関係性」よりも「見えているまま」を表現することを優先した文といえるだろう。

## 7. まとめ

日本の防疫対策が「外」からの侵入防止対策と養鶏場「内」での衛生管理に2分割されていることは、日本語に特徴的な「ウチとソト」という空間認知の仕方が反映していると考えてまず差し支えないだろう。そのことはSE検査陽性時の対応が日米間で異なることにも影響している。つまり、日本の防疫指針では検査が陽性であった鶏群は淘汰する。ウチの中は清浄化が求められることから、陽性の鶏群は淘汰され、さらに鶏群を入れ替えることでウチの中の清浄化は維持できるという考え方がうかがえる。米国の防疫指針の考え方には、「清浄区」(ウチ)という発想はなく、検査結果が陽性であった鶏群であっても確率論で安全性を評価し、その後のエッグテストの結果が陰性であれば、テーブルエッグ市場(生鮮市場)への出荷が可能になる。

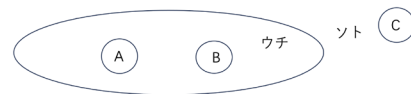
日本語は、「視野の共有」をしながら情報交換が進むことから、知覚的(視覚的)な発想が好まれる。これが、日本では殺菌条件が殺菌温度、殺菌時間という知覚的な判断を基準とした表現となっている理由であろう。米国では殺菌条件が、logという思惟的(数学的)な表記となっている。

場面内視点あるいはイマ・ココの認知では、時間の把握は「生きた時間」の流れとなり、客観的な時間の把握は本文ではなく付記にまとめられていた。一方で、防疫指針本文が客観的な表現になっていることを考えると、文章を客観的な表現にしたからといって、時間の把握が客観的になるとは限らないことも明らかとなった。客観的な表現であっても「行為者」が明示されていないと「語りの場が認識の原点」である日本語の特徴が維持されているのではないだろうか。日本の発想では客観的な時間の把握がしにくいことは、「計画書の作成」の優先順位が低いことに結びついている可能性があることを指摘した。

日本の防疫指針で「陰性証明書」が突然登場するのは、当事者にとっては「見えている」からと結論付けた。心理学実験の結果は、日本語の事態把握が、画面全体を『見えているまま』に把握していることを示している。英語は「図」を絞り込んで文章化しているようである。日本語の場面内視点の話者同士の会話は「視野の共有」を前提としているので、「見えているまま」が言語化される。英語は、「視野の共有」を前提としていないので「関係性」が表現の対象となることも確認した。文構造という視点から、日本語の語順は柔軟であることをみだが、「見えているまま」を表現するためには好ましいであろう。

上記の関係を図示すると図7のようになる。「ウチ」とは五感の及ぶ範囲であると考え、「見えていること」さら

には「視野の共有」が日本的な発想を特徴付けているように考えられる。



ウチとソト： A、Bは日本語話者。「ウチとソト」という空間認知を行うが、ウチとは五感の及ぶ範囲。Cはソトの人。

視野の共有： 五感の一つである視野を共有することは「ウチとソト」に関係なくAとBとのコミュニケーションの前提になる。ソトを見る場合も「視野の共有」をしている。例えば、ソトの人Cを見る場合でも「視野の共有」をする。但し、Cとは視野を共有していない。ウチの中は五感の及ぶ範囲であり、知覚的(視覚的)な発想をしやすい。

時間の把握： A、Bは場面内視点、イマ・ココの認知で時間を把握し、「生きた時間の流れ」になる。但し、文章を客観的な表現にしても、「行為者」を明示しないと場面内視点のまま。

Figureの絞り込み： A、Bは視野が共有されているので、Figureの絞り込みをせずに見えているままを言語化する。その言語化された視野を共有しながら会話が成立していく。場面外視点では「視野の共有」を前提にしないのでrelationshipを明確にしないと会話にならない。

図7 まとめ

## 謝辞

本研究をご指導頂いた大橋理枝教授には、認知言語学の本のご紹介から、論点整理を含め、常に知的刺激を与えて頂きました。本当に感謝申し上げます。

ゼミの皆様には励ましを頂きありがとうございました。

⑫は妻伊都子の発案です。ここに記して感謝します。

## 引用文献

- [1] 佐藤静夫 (1998) 「サルモネラ食中毒の発生状況とサルモネラ対策の概要」 鶏病研究会編 『鶏卵・鶏肉のサルモネラ全書——安全な鶏卵・鶏肉の生産・流通のためのサルモネラ対策』 第2章 (株) 日本畜産振興会 1998 (第1版) 2004 (第3版)
- [2] FDA (2001) “Small Entity Compliance Guide: Safe Handling Statements on Labeling of Shell Eggs and the Refrigeration of Shell Eggs Held for Retail Distribution” 2023年8月10日参照 [米国での鶏卵販売時のラベル表示について] <https://www.fda.gov/regulatory-information/search-fda-guidance-documents/small-entity-compliance-guide-safe-handling-statements-labeling-shell-eggs-and-refrigeration-shell>
- [3] FDA (2018a) “Rose Acre Farms Recalls Shell Eggs Due to Possible Health Risk” 2023年8月10日参照 [米国での鶏卵回収事故について2018年4月17日付け] <https://www.fda.gov/safety/recalls-market-withdrawals-safety-alerts/rose-acre-farms-recalls-shell-eggs-due-possible-health-risk>
- [4] FDA (2018b) “FDA Investigated Multistate Outbreak of Salmonella Braenderup Linked to Shell Eggs from Rose Acre Farms” 2023年8月10日参照 [米国での鶏卵回収事故について2018年6月14日付け] <https://www.fda.gov/food/outbreaks-foodborne->

サルモネラ菌食中毒の防疫指針における  
日米間の発想の違いについて

- illness/fda-investigated-multistate-outbreak-salmonella-braenderup-linked-shell-eggs-rose-acre-farms
- [5] 食品安全委員会 (2010) 「食品健康影響評価のためのリスクプロファイル ～ 鶏卵中のサルモネラ・エンテリティディス ～」(改訂版) 2023年8月10日参照  
[https://www.fsc.go.jp/sonota/risk\\_profile/risk\\_salmonella.pdf](https://www.fsc.go.jp/sonota/risk_profile/risk_salmonella.pdf)
- [6] 厚生労働省 (2023) 「令和4年食中毒発生状況」 2023年8月10日参照  
<https://www.mhlw.go.jp/content/12401000/001075566.pdf>
- [7] CDCのサルモネラに関するHP 2023年8月10日参照  
<https://www.cdc.gov/salmonella/index.html>
- [8] 農林水産省 (2005) 「鶏卵のサルモネラ総合対策指針」 2023年8月10日参照  
[https://www.maff.go.jp/j/syouan/douei/eisei/e\\_kanri\\_kizyun/sal/pdf/keiran\\_sogo.pdf](https://www.maff.go.jp/j/syouan/douei/eisei/e_kanri_kizyun/sal/pdf/keiran_sogo.pdf)
- [9] FDA (2023) “PART 118 PRODUCTION, STORAGE, AND TRANSPORTATION OF SHELL EGGS” 2023年8月10日参照 [防疫対策指針]  
<https://www.ecfr.gov/current/title-21/chapter-I/subchapter-B/part-118>
- [10] 金谷武洋 (2004) 『英語にも主語はなかった』 講談社。
- [11] 濱田英人 (2016) 『認知と言語 日本語の世界・英語の世界』 開拓社
- [12] 山梨正明 (2019) 『日・英語の発想と論理—認知モードの対照分析』 開拓社
- [13] 姫野伴子 (2009) 「4. 日本語話者は<見え>のままに話す 4.1 『ここはどこ?』(私は見えない)」池上嘉彦・守屋三千代編著『自然な日本語を教えるために—認知言語学をふまえて』(pp.60-64) ひつじ書房
- [14] 牧野成一 (1996) 『ウチとソトの言語文化学—文法を文化で切る』 アルク
- [15] ベルク, オギュスタン (1985) 『空間の日本文化』(宮原信訳) 筑摩書房
- [16] 尾野治彦 (2018) 『「視点」の違いから見る日英語の表現と文化の比較』 開拓社
- [17] 守屋三千代 (2009) 「4. 日本語話者は<見え>のままに話す 4.7 『ネコ, おにぎり食べている』(イマ・ココで見てる:『テイル』)」池上嘉彦・守屋三千代編著『自然な日本語を教えるために—認知言語学をふまえて』(pp.98-102) ひつじ書房
- [18] 増田貴彦 (2010) 『ボスだけを見る欧米人 みんなの顔まで見る日本人』 講談社
- [19] 厚生労働省 (1993) 「液卵の製造等に係る衛生確保について」 2023年8月10日参照  
[https://www.mhlw.go.jp/web/t\\_doc?dataId=00ta5861&dataType=1&pageNo=1](https://www.mhlw.go.jp/web/t_doc?dataId=00ta5861&dataType=1&pageNo=1)
- [20] Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik, (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman, London/New York.
- [21] Langacker, R. W. (1999) *Grammar and Conceptualization* (Cognitive Linguistics Research 14). Mouton de Gruyter, Berlin/New York.
- [22] 佐藤良明 (2017) 「異言語としての英語 (3): 英語と日本語の構文論」滝浦真人・佐藤良明編著『異言語との出会い: 言語を通して自他を知る』第3章 (pp. 46-66) 放送大学教育振興会。